

〔第32回学術集会 共催シンポジウム〕

アロケアの連携による子育て家庭の支援

早稲田大学 名誉教授

根ヶ山光一

哺乳類の子育ては母親と子の結びつきが核となるが、しかしながら母子関係は結合（求心性）ばかりではなく、誕生の瞬間からすでに分離（遠心性）が混合したものである。遠心性を生み出す母親以外、両親以外による子育てはそれぞれアロマザリング、アロペアレンティングと呼ばれ、そういった他者による子育てはアロケアと総称される。

動物のアロマザリングは雌によることが多く、哺乳類の雄も一部の例外を除き一般に子育てに不熱心であるとされる。父親は、親として遺伝子の共有率（血縁度）は母親と同じでありながら、その養護性は母親と大きく異なっている。家族という繁殖集団、とくに父親が子育てにどう関わるかは、ヒトの子育てにとって大きなテーマである。

ヒトは、未熟期の長い子どもを複数かかえて育てる霊長類であり、また子が行動的に未熟な状態で生まれ（二次的就業性）、出生直後から子が母親から長く離れるという特徴をもつため、とくに他者による支援（協力育児）が必須である。ヒトの子育ては、母子を核としつつも、子育てを安全に行う囲いとしての「家庭」のおかげで、父親を含む家族が子の近くに位置取りし続け、子に関与する機会が多い。

さらに、地域における近隣や専門家を含む非血縁者がそれをとりまき、多層的で相互補完的なアロケアシステムによって子育てが行われるのがヒトの特徴である。とりわけ核家族においては、アロマザーとしてのヒトの父親の比重は極めて重い。母親に子育てを任せてしまわないで夫婦が協力できるように、父親の養護性を育む努力が必要である。

生活のため両親の重労働が必要な沖縄の離島社会

では、子育ては労働力としては副次的な年配女性や少女など家族内外のアロケアによって支えられてきた。しかしその離島でも、本土復帰にともなう保育所設置や二次産業化などとともなうといったアロケアが衰退し、入れ替わりに父親がアロマザーとして積極的に子育てに参加するようになった。この少女から父親へというアロケアの交替は、守子を地域の子ども集団に参加させるうえで大きな力となる子どもの遊び経験が減少しないように、看護師などの第三者が父親と子どもをコーディネートすることが望ましい。

出産や哺乳を考えれば明らかなように、子育てには医学的知識と技術が不可欠である。家族の健康にも医療的支援が必要である。医師・看護師は保育士とともに、家庭外での専門家による子育て支援の典型といえよう。新型コロナのパンデミック時にはその支援が特に求められたが、それにもかかわらず親の中には医学への信頼が低い者もあり、そのうちの一定数はパンデミックへの対応の明確な準拠枠組みを持ってないでいた。

医療関係者のアロケアをうまく機能させるには、看護師が医師と親をつなぐインターフェイスとなって家族をエンパワーし、健康作りを通じて家庭と地域の子育てネットワーク作りを支援することが重要である。そのために看護師は心理学者とも連携して、母子関係・父子関係や子どもの発達についての正しい知識を身につけておくべきである。

看護師のこれらの課題は、医学・看護学・心理学の立場から、学際的に乳幼児の親子関係や心身発達を考えようとする乳幼児医学・心理学会のめざすところとも重なり、アロケアの視点を介して共通の問

題意識を共有している。それぞれが互いの視点と課題をもちより、意見交換することが課題の解決に有効であろう。

略歴

1951年 香川県生まれ

大阪大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程中退。博士（人間科学）

大阪大学人間科学部助手、武庫川女子大学家政学部講師、早稲田大学人間科学学術院教授などを経て、現在早稲田大学名誉教授。

NPO法人保育：子育てアドバイザー協会理事長、日本乳幼児医学・心理学会理事長

専攻—発達行動学

著書—『発達行動学の視座』（金子書房）、『〈子別れ〉としての子育て』（日本放送出版協会）、『「子育て」とのらわれを超える：発達行動学的「ほどほど親子」論』（新曜社）、『アロマザリングの島の子どもたち』（新曜社）、『抱え込まない子育て：発達行動学からみる親子の葛藤』（岩波書店）

共著—『子別れの心理学：新しい親子関係像の提唱』（福村出版）、『共有する子育て』（金子書房）、『からだがかたどる発達：人・環境・時間のクロスモダリティ』（福村出版）、『ヒトの子育ての進化と文化：アロマザリングの役割を考える』（有斐閣）ほか多数